

第 21 回(2009. 8.13 配信)

雲竹齋先生の歴史文化講座 - 「8 月はお盆」

8 月はお盆である。仏教にはお盆という先祖を供養する大切な行事がある。地域によって多少のズレはあるが、旧暦で 7 月 15 日に行う行事である。旧暦(太陽太陰暦)7 月は現在の暦(太陽暦)では 8 月ごろだから、8 月に行われる地方が多い。

お盆は中国語の「盂蘭盆(うらぼん)」からきているが、その語源はウランバーナといって、古いインドの言葉で逆さ釣りの意味なのだという。お釈迦様の弟子である目蓮という人が、亡くなった自分の母親がどうしているか知りたくて、お釈迦様をお願いしてそっとあの世を覗くと、母親は餓鬼道に落ちて、逆さ吊りになって苦しんでいた。目蓮は、「この逆さ吊りの苦しみから救っていただきたい、その救いの道をお教え下さい」と、お釈迦様をお願いしたところ、お釈迦様は「毎年 7 月 15 日に、5 穀と 100 の料理をととのえ、仏の供養をし、衆僧に施食すれば、その功德で七世の父母を救うことが出来る」といわれた。つまり、いっぱいご馳走を作って仏にお供えして、ついでにお坊さんにも食べさせてくれ、というのである。これがお盆供養のいわれのひとつである。

お盆の行事は「盂蘭盆会(うらぼんえ)」というが、推古天皇が 606 年に 4 月 8 日と 7 月 14 日に齋(いつき = 潔齋)を設けたという。また 657 年には斉明天皇が盂蘭盆会を行ったという記録がある。奈良・平安時代には、毎年 7 月 15 日には公の行事となった。お盆の行事は、なにも 7 月 15 日だけでなく、1 日は「地獄の釜の蓋が開く日」とされて、山や川から村に通じる道の草刈りや道路の補修をして、故人が彼岸(あの世)から帰りやすいようにする風習が残っている地方もある。7 日は七夕だが棚幡とも書いて、故人を迎える棚(精霊棚)と幡を作る日とされている。12 日の夕方は家の門前に火を焚き、明るくして個人をむかえるが、これを「迎え火」という。小さな提灯を持ち、墓に行き、故人が迷わないように提灯のローソクに火を灯してお連れするという風習もある。16 日には、12 日同様に提灯に火をともして墓までお送りする。このとき炊く火を「送り火」といい、京都の「大文字焼」と呼ばれる「五山の送り火」は有名である。地方によっては、キュウリやナスに楊枝を刺して牛や馬に見立てた供物を作る。それには、馬は彼岸から家に早く戻ってきてほしいように、また帰りはゆっくり帰ってもらうために、歩みの遅い牛に乗って帰ってもらうという願いが込められている。

鎌倉時代からは、盂蘭盆会に「施餓鬼会(せがきえ)」をあわせて行うようになった。施餓鬼会とは、「餓鬼道」に陥った亡者を救う風習であり、「灯籠流し」や「精霊流し」などが行われる。仏教でいう餓鬼とは、いつも餓えと渇きで苦しんでいる亡者のことである。

仏教には輪廻転生という説がある。この中の一つが餓鬼道である。この輪廻転生説とは、人間は六つの世界を生まれ変わり続けるというもので、この輪廻転生説にはいろいろあるが、そのひとつに「六道説」があって、六道とは天道、人間道、阿修羅道、畜生道、餓鬼道、地獄道の六つを指すという。地蔵菩薩は六道を自らの足で行脚して、水子の魂を救ったり弱い者を助けたり、人々の身代わりになって困っている人を救済したという話が多くあって、人々から信仰されているが、地蔵菩薩の立っている下に餓鬼道の入口があって、お地蔵さまに水をかけると飢餓に苦しんでいる人が餓え渇きをしのげるという。

この施餓鬼会には卒塔婆(そとうば)を建てるところがある。この卒塔婆は、一部の宗派を除けば、個人の供養のために法要などの際に建てられるが、お墓などで見かける木製の薄い板状の塔婆で、墨で戒名や梵字などが書かれている。本来は仏塔を簡略したもので、五重塔や五輪塔と同じ

く「五大」を表現しているという。五大とは仏教の世界観を表しており、地、水、火、風、空の五つで宇宙を構成しているという。だから、卒塔婆の上部には4カ所切り込みが入っていて、五大を表しているのだが、密教ではこの五大を五輪と呼び、五輪塔を造る。

ちなみに、五重塔や五輪塔の「塔」は仏塔のことである。サンスクリット語で「ストゥーパ」といい、漢字の音読みから「卒塔婆」と書かれたので、これが「塔婆」になり「塔」と呼ぶようになった。この仏塔が楼閣形式になって日本に伝わり、五重塔や三重塔が建てられたが、中には奈良の説山神社のように十三重塔もある。法隆寺の五重塔は日本最古の仏塔であるという。塔は、紀元前3世紀頃からインドで釈迦の遺骨や棺などを焼いた灰など、仏舎利を収めたものである。日本では崇峻元年(588)に本格的な伽藍(がらん)が造られて、法興寺(後の飛鳥寺)と呼ばれた。伽藍とは、サンスクリット語からきており、僧侶が集まり修行する場所の意味だが、その後、寺院の主要建築物を指す言葉になった。

飛鳥寺は塔を中心に北、東、西の三金堂で囲む形式だが、推古元年(593)に建立したという四天王寺の伽藍は、南から南大門、中門(仁王門)、塔、金堂、講堂の順に一線上にあり、中門から左右に回廊が講堂に結ばれていた。また、平城京の遷都(710)に伴い、飛鳥から現在の地に移されたという薬師寺になると塔が左右に建てられて金堂が中心になった。延暦8年(769)完成した東大寺は、塔が中門から講堂に繋がる回廊の外にある。奈良時代には伽藍建築に一定の法則があったが、平安時代、密教が険しい山の中に寺院を建築するようになってから、伽藍にはあまり法則が見られなくなった。こうして、時代とともに本尊が祀ってある金堂が仏塔の役割を担っていき、塔は伽藍のシンボルとなっていった。

これらの話の多くは、信州にある我が家の菩提寺の住職が教えてくれたものだが、この住職は、長野冬季オリンピックの時も外国の選手団に本堂や庫裡を提供したり、夏休みや冬休みに子供を集めて勉強会をさせたり、檀家と世界中を巡礼したりでなかなかのお坊さんで、雲竹斎が尊敬している郷里の大先輩のひとりである。かなり以前の話だが、このお寺の本堂が焼失してしまった。知恩院の末寺だから、京都から駆けつけてきた役僧に、「おいたわしや、ご本尊さまがこのようなお姿に」といって、焼けこげた木片を差し出した。役僧は、「良くぞ見つけだされた。これなら新しいご本尊さまを造って、魂をお移しすることができましよう」といったそうである。「ご坊さん、焼け跡に転がっていた木の根っこでも差し出したんじゃねえのかい？」と聞いたら、「何をいうか！」と怒鳴りしたが、眼は笑っていた。また、長野県松代群発地震の際に葬式があった。ちょうどお経を読んでいたところに大きな揺れがあって、参会者はみんな会場から飛び出したが、この坊さんは崩れる祭壇を直しながら平然とお経を続けていたくらいの豪快な坊さんである。

宗教法人は税制上の優遇制度もあり、檀家が良いれば生活も楽だろう。「坊主丸儲け」という言葉もあるくらいだから、この雲竹斎も僧侶になりたいと思うこともあるが、死体やお墓と聞いただけで震える臆病者だし、僧侶の修行もなかなか厳しそうなので、思っているだけで実行する勇気はない。歳をとるにつれて、頭だけが勝手に坊主になっていくのが悲しい。